

第5回 対談 宇佐美志都（書家）×佐野隆治会長  
今を捨て、次に踏み出す勇氣

（神田外語とともに歩んできた人々の証言）



昭和9（1934）年7月7日生まれの佐野隆治会長は、平成23（2011）年の誕生日で77歳の喜寿を迎えます。この記念として、神田外語いしず系会では、書家・宇佐美志都さんとの対談を企画しました。宇佐美さんは、書家としての活動に加え、国際的な交流を通じて、日本の文字文化を世界に広めている方です。対談でおふたりは、書家と学校経営者という立場の違いを超えて、多くのことに共感されていました。さらに佐野元泰理事長の発案で、対談で得た佐野会長のイメージを宇佐美さんに書画の作品にさせていただきました。果たして、どのような作品が生まれたのでしょうか？

**宇佐美志都さん（以下、宇佐美）：**ぜひ、お伺いしたいと思っていましたのは、外国語を教える学校を始められたとき、どのような社会状況だったかということです。当時の社会は、今とはずいぶん価値観が違ったのではありませんか？

**佐野隆治会長（以下、佐野）：**外国語学校をやりたいって言い出したのは、うちの親父でね。彼には先見の明があったんですよ。先を読むのが非常に得意だった。学校ができたのは、昭和38（1963）年です。これからの平和な社会を創っていくために、日本人は外国人とも付き合わなくちゃいけない。グローバル化なんて言葉もなかった時代ですよ。そこで、学校を作って、若い人たちが外国語を話せるようにしていこう、というのが始まりです。

**宇佐美：**外国語学校をご創業されたお父上のもとでお育ちなって、なめらかに英語をお話しになりそうな感じがいたしますが。



佐野：いやいや、親父も僕も外国語は強くありません。学校を始めるまでは、語学とはまったく関係のない人生を送ってきたんですから。僕はね、語学学校の経営者としては、自分が語学ができないほうがいいと思っています。自分ができないから、できない人の悩みが分かる。どうしたら学生さんたちが楽しめて、早く覚えられるかを一生懸命考えて、先生方と新しい方法を開発してきた。語学ができない人たちに、「神田に行けば、どうにかなる」と認めてもらって、今があるってことですかね。そうやって初めは小さかった学校が少しずつ大きくなってきたんです。



宇佐美：プリティッシュヒルズにも何度か伺わせて頂いております。あちらを創られた経緯というのも、同じような理由からですか？

佐野：言葉を覚えるには環境と回数が必要です。和室で英語を話そうとしても、なかなか難しいですね。

宇佐美：気持ちが整いませんよね。

佐野：そうですね。プリティッシュヒルズに行くと、英語を使ってもおかしくない雰囲気、なんとなくあるじゃないですか。

宇佐美：崇高な雰囲気がございますよね。椅子の1脚、図書館の本の1冊にも「本物」にしかない重みを感じます。時を重ねて、錆びていくのではなく、重みを増していくというか。



佐野：昭和38（1963）年に学校を始めましたが、当時は外国の映画もどんどん来ていました。なかには、日本の場面もあるんですね。日本人が出てきたり、日本の家や庭も登場しますが、ぜんぶインチキなんですよ。

宇佐美：外国の映画で、着物の合わせが逆になっているときもありますね。

佐野：何か違いますよね。私たち日本人が見ると、韓国と中国の文化が一緒になったような感じを覚える。ということは、私たち日本人が西洋のものを作るときに、同じことをやってしまう可能性がある。西洋人が見たら、「なんだこれ？」となりますよね。

宇佐美：身近な例だと、Tシャツにふさわしくない英語が書いてあったりとか。

佐野：それだと、相手の文化をバカすることになってしてしまう。本物の環境でなければ、英語を学ぶのにも興ざめして、本気になれない。だから、スタッフには、裏に回っても嘘のない本物を創るように指示しました。おかげさまで、ブリティッシュヒルズには、英国大使館の方々にも来ていただいています。ご自分たちの国の建物だという感じがするのでしょうか。（1/6）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第5回 対談 宇佐美志都（書家）×佐野隆治会長  
今を捨て、次に踏み出す勇氣



**書いて表現できる文字の世界。  
東アジアに生まれた醍醐味を感じています。**

宇佐美：佐野会長がおっしゃる通り、人間の教育のなかで環境は大きいと思います。家庭環境もきっとそのなかに入るのでしょうか。私の母も書を教えていたので、実家には、普段の生活のなかに墨や筆があり、メモ書きも筆ですのような環境で育ちました。幼い頃は、一通りお稽古ごとに通わせてもらいましたが、残ったのが自分に一番近い書でした。英会話も習いましたが、いまだに宿題として残っていますね（笑）。

佐野：そうですね、本格的な書の勉強というのは、「王羲之（おうぎし）」から始まるんですか？

宇佐美：いわゆる書道やお習字は特に整った美しさを求める「整齊美（せいせいび）」の要素が大きいですから、やはり基礎をしっかり学ぶことが大切です。「学ぶ」というのは、「真似ぶ」ということです。その学びが、人の根底の部分、礎をかたちづくっていきます。

佐野：なるほど。言葉は人の礎であるというのは同感ですね。

宇佐美：言葉には「語られる音声言語」と「書かれる文字言語」の2種類があります。日本を含む東アジア文化圏は、文字を記す言語が使われていて、文字に書いて表現できる言葉の世界というものを授かっています。ですから、東アジアでは、政治家や文人などさまざまな立場の人が、「書いて表現すること」を尊んできました。言葉を書く、言葉を書いて遊ぶ。私は、自分の職業が書家であるということを超えて、東アジアに生まれたことの醍醐味を感じています。



佐野：中国の書道と日本の書道は違いますね。日本の書道は、文字で表現する「美」を追求する。



宇佐美：余白も美しさも、そのひとつですね。

佐野：そこが日本人の特徴でしょう。私は、日本人ってすごいなと思いますよ。中国でも、きれいな文字やよい文字というのは、それぞれの大家がいるのですが、日本の書道はひとつの文字から感動を生もうとする。そうすると、原点をしっかり学んで、いったんそれを壊して、また作り上げていかなきゃならない。先生は、すごいことをおやりになっていると感心しますよ。

宇佐美：作ったものは愛おしい。ただ、花にしても、きれいな姿から枯れて変化していきます。永久保存はできません。四季なども、常に変化する無常の世界。書にしても、自分のスタイルを壊していく勇氣が必要です。忘れるということも、次を吸収するためにあることですからね。佐野会長はどうお感じになりますか？



佐野：経営でも、創ること、そして壊すことが大切です。創るうえで、一番大変だったのは、家族や身内に理解してもらうことなんです。プリティッシュヒルズなんて、その際たるものでした。まあ、反対されましたよ。

宇佐美：普通のご家庭でもめるような規模とは違いますからね（笑）。

佐野：場所から反対されたんです。福島山奥なんかを作ってどうするんだと。東京と大阪の間のほうがいいじゃないとかね。ただ、あの場所には選んだ理由があります。敷地は100万坪あります。台地になっていて、下から登ってくるには1本道だけで、あとはすべて崖になっている。うちの学校は女子学生が多いから、この環境だったら安心です。女子学生がいるからって、鉄条網のフェンスでは囲みたくなかったんです。（2/6）

第5回 対談 宇佐美志都（書家）×佐野隆治会長  
今を捨て、次に踏み出す勇氣

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**西洋人は同調しないのだから、  
日本人も日本人らしくあればいい。**

宇佐美：私はどちらかと言うと、学ぶことに執着が強いところがあるんです。大学を出てから、書家としての活動を始めて、でも文字の成り立ちがもっと学びたくて、京都にある文字文化研究所に3年ぐらい通いました。亡くなられた白川静先生につかせていただき、手前味噌になりますが、最年少で「文字文化認定講師」を拝命いたしました。2年前にはロンドン芸術大学のテキスタイル学科に留学しました。自分の世界を表現するだけでなく、海外の方にも日本の書をより感じていただきたい、発信していきたいと思うようになっていたからというのも一因でした。

佐野：芸術や文化を海外に広く知らしめるのは非常に難しいことだなと思います。例えば、漢字の「人」は、「人と人が支え合っている」ことが語源だと言われる。私たち日本人は感覚的に理解できますよね。ところが西洋人は、独立主義だからピンとこない。支え合って生きていることが、美德ではない社会だから。「私と神様のつながりがあって、人はそれぞれ独立している」と考える西洋人には、東洋人への説明では分からない。

宇佐美：ということは、東洋人が西洋の文化を感覚的に深く理解することは難しいとも言えますね。



佐野：そうですよ。例えば、東洋人で西洋音楽を理解できる人はすごい。西洋音楽を感覚的に理解して、心の底からいい音楽だと思えるのだから。僕は、それよりも、三味線や太鼓、民謡のほうが、心に響く。学生さんたちにも、日本的なものを大切にしてほしい。だって、外国の考え方に寄り添ったところで、「あいつは自主性がない」と見下されるだけですから。



宇佐美：そうですね。本で読んだような内容を言ったところで、何も伝わりませんよね。

佐野：そうそう。どっちにしろ、西洋人は同調しないのだから、日本人も日本人らしくあればいい。

宇佐美：自分をきちんと持ってですね。

佐野：「英語落語」っていうのを、学生さんたちにやらせるよう言っているんですよ。

宇佐美：英語落語？



佐野：落語家さんのなかには、英語で落語をする方がいるんですよ。僕はこれを学生さんが自分をプレゼンするのに使えると言っている。例えば、「時そば」っていう短い落語があります。勘定を払っているときに、「いま、なんどきだ？」ってそば屋の親父に聞いて一文を儲けるっていう話ですけど、そばをハンバーガーに置き換えてもいいんじゃないかと。3分ほどでできるから、英語で覚えてパーティーでやればいい。きっと人気者になって、外国人からも認知してもらえますよ。

宇佐美：存在を認知してもらえれば、そこで生きていけますね。まさに、日本の文化である落語と学んできた英語の両方を使える妙案ですね。

佐野：日本人は体が小さいし、パーティーに行ったら見劣りするじゃないですか。でも、それは持って生まれたものだから、しょうがない。だからこそ、自分をアピールするものが必要だと思いますよ。(3/6)

第5回 対談 宇佐美志都（書家）×佐野隆治会長  
今を捨て、次に踏み出す勇氣

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**日本の文化と意見を持ちながら英語を学ぶ。  
日本人に合った語学教育ができると信じています。**

宇佐美：イギリスに留学していたときは、大学の寮で生活していました。様々な文化慣習を知り合うことの連続で楽しくもありました。着物も持っていったので、着ることもありましたよ。着物も日本人のアイデンティティを示せるものですね。

佐野：着物で外国の街を歩くと、みんな振り返りますものね。うちの学生さんにも日本人としてのアイデンティティを持たせてやりたいと思っています。

宇佐美：神田の学生さんたちは、会長のそういったお考え方を感じていらっしゃるでしょうね。

佐野：でも、難しいのは個人としてのアイデンティティを強く持つと、外国ではよいのだけれど、日本の社会では難しいことになる。

宇佐美：会社や組織では、目立ちすぎると好まれない時がありますね。

佐野：そうなんです。それが難しい。

宇佐美：ただ、これからの時代は神田の卒業生が社会の旗振り役になっていく時代になっていくのではないのでしょうか？

佐野：そうだとすると、100年はかかるでしょうね。





宇佐美：100年の計ですか。

佐野：10年ほど前から、そんなことを考えるようになりましたね。それまでは、どうにか自分の代で大きく変えられると思っていました。でも、世の中って、そう変わるもんじゃない。気長にやっていきながら、後まで続く人間を育てていけば、そのうちどうにかなるだろうと思うようになりました。文科省が小学校の5年、6年で英語を学ばせる決断をしたから、少しは変わるでしょう。

僕は日本人に合った語学教育ができるはずだと信じています。国際社会のグローバル化のなかで、日本の文化や日本人としての意見をきちんと持ちながら、英語を学ぶ教育というものがね。ただ、これはまだ研究もされていない。みなさんに、やってほしいと言い続けているんだけど、なかなか進まないですね。

宇佐美：壮大な展望ですね。

佐野：日本人が外国語を学んで、外国人と交流して、平和な世界を創っていくには、宗教も絡んできます。三大宗教というものがありますね。キリスト教、イスラム教、仏教。このうちキリスト教とイスラム教は、「一神教（いっしんきょう）」です。

宇佐美：ひとつの神様を崇める宗教、唯一神ですね。

佐野：そうそう。同じ源流から分かれた宗教です。ただ、一神教だと他の宗教を許さないから必ず戦いが起きてしまう。その点、仏教は緩くて、あらゆるものに神が宿ることを認めています。とにかく、本当の平和を考え出したら、宗教を改革する必要がある。それは、数百年の単位の話ですから。

宇佐美：東アジアはもともと「八百万（やおよろず）の神」が基本で、森羅万象を愛でる。神はひとつではなく、すべてに宿る。一神教の地域とは違います。漢字にもその心が表れています。



ちょうど今朝、夏に発表する原稿を書いておりました、節電の「電」という漢字を題材にしてみました。電という字は、「雨かんむり」と「申」というつくりで成り立っています。この「申」という漢字は、「神」を意味します。今は、電気は作るものですが、かつては天から稲妻として降りて来る神だったのですね。

日本人にとっては、すべてが神のようなありがたい存在で、物の大小を問わず、生きとし生けるものが尊い。漢字をたどっていくと、日本人の価値観や西洋人と比べてどこかのんびりしている要因も紐解けるのかな、と感じていたところでした。(4/6)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第5回 対談 宇佐美志都（書家）×佐野隆治会長  
今を捨て、次に踏み出す勇氣



**中途半端な出来の作品を捨てる勇氣がなければ、次の作品は決して降りて来てくれない。**

佐野：僕はね、人は遊ぶことが大切だと思うんですよ。遊びは日常から離れること。日常は勤勉に、きちっと働く。でも、そこから外れることが人間には必要なんです。そうすると、いろんなことを感じられる。書でも、上手に、きれいに書きますね。でも、そこからは自分が出てこない。壊すっていうのかな、それがないとね。

宇佐美：そうですね。壊すことで生まれるものがあります。壊すことからしか生まれない、という言い方もできますね。

佐野：でも、壊せば元に戻るんですよ。子どもがそうですよ。おもちゃがあったら壊すけど、直そうともする。小さい頃は直せないけど、大きくなるにつれて、直せるようになってくる。だから、まず壊すことが大切なのかなと。若いうちは多少、軌道から外れてもいいと思うんですよ。きっと自然に直す力が働いていくはずだから。

宇佐美：壊し時、って自分にしか分からない。でも、そのとき、そのとき、溢れてくるものがありますからね。

佐野：組織にも何かを壊すことが必要なときがあります。これが、一番大変なんだ（笑）。創るほうがずっと楽ですよ。ひとつの精神で、ひとつの組織を創っていくのは、割と楽ですよ。でも、いったん創った仕組みを壊すのは、数倍の力が必要です。みんな、その仕組みに安住しちゃうから。「これをやっていけば間違いない」という価値をひとつずつ壊していかななくちゃいけない。



宇佐美：書の世界でも壊すことが大切です。それなりによい作品が出来るときがあります。でも、「これだ！」っていう確信が持ていない場合、そういった作品を捨てずに身の回りに置いておくと、真の作品は絶対に生まれないんです。そこは見切って、もったいないけれど、「これを捨てられる自分であれば、きっとまた溢れられるはず」って信じるしかありません。中途半端な出来の作品を捨てる勇気がなければ、次の作品は決して降りて来てくれないのです。都合のよい話は、なかなか、ないものですね。



佐野：なんとなく、分かる気がするね。壊しちゃうと無になってしまう。また、創らなければならない。それを繰り返すには、本当に強いエネルギーが必要なんだということですね。分かりますよ。

宇佐美：中国の書のなかに、「満而不溢」という言葉があります。人は、満ち満ちていくけれど、決して溢れない、という意味ですが、お話を聞いていると、佐野会長は、ずっと満ちて溢れてこられたような、これからも、泉のように溢れていくような印象を受けました。

佐野：いやいや、単に、浮気なだけですよ。

宇佐美：浮気？



佐野：根底がないから、すぐに根底を崩して、新しいことをやらなきゃと思う。単なる浮気者に過ぎないですよ。芯がしっかりしていないと、自分では思っています。それに、僕は執着心があまりないんです。人生は執着も必要だけど、執着が強すぎると発展できない。執着しないから、捨てられる。

宇佐美：皮を脱いで、脱皮する。人生の節目では、切り替えて、捨てて、自分を律していく勇気が必要なのかもしれませんね。

佐野：孔子が「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。」と言っていますが、座っていて、立ったから、かたちが変わるわけでしょう。

宇佐美：そこに変化がある。人生の節目には必ず変化がある。

佐野：本来の意味は違うかもしれないけれど、僕は、孔子の言葉に、そんなことも感じますね。(5/6)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第5回 対談 宇佐美志都（書家）×佐野隆治会長  
今を捨て、次に踏み出す勇氣



学園の理念に込められたふたつの「世」  
次世代へとつながっていく生命・魂。

対談の数週間後、宇佐美さんから佐野隆治会長を表現した作品が届きました。作品には宇佐美さんよりこんなメッセージが添えられていました。

『葉』揮毫に寄せて

「葉」という漢字は、木から新しい枝が出、その上に生ずるものの形。

その姿は、佐野学園という大きな幹から、それぞれの学生が枝となり、卒業生が未来へ向って生い茂っている様と重なりました。そして、それは同時に、佐野学園自体が、創立者であられる佐野公一氏、佐野きく枝氏、そして会長・佐野隆治氏、理事長・佐野元泰氏と、揺るぎなく継承されている様とも重なり、この度、貴殿の喜寿お祝いに際し、「葉」という漢字を選び、揮毫させて頂きました。

『言葉は世界をつなぐ平和の礎』この理念の中には、ふたつの「世」という漢字要素が含まれていることはお気づきでしょう。「葉」の構成部分である「世」と、世界の「世」。この「世」という漢字は、ひとつの生命で終わらず、その生命・魂が、次世代へと繋がっていること、つまり、世代を意味しています。歌集『万葉集』という意味も、万世に継承したい言葉・歌という想いがその命名の由来のひとつ。貴殿におかれましては、公私共にふさわしい漢字であろうと、文字学的にも確信をしております。





ページ内写真 広報部撮影

佐野学園のシンボルマークの赤は口、青が地球に当たるという事を、理事長・佐野元泰氏から、ひと頃前に説いて頂いたことを思い出し、表具は、清涼しい緑味を帯びた青の天然草木染本絹シケ素材を使用。また、額には、吉野杉を使用し、会長室調度品の色味を鑑み、色を重ねました。

(表装・・・澄心堂・ちょうしんどう/馬穀・まーたけし)

本日、平成二十三年七月七日、七十七歳を迎えられる貴殿に、この「葉」を、「いしず糸会」、そして、佐野学園関係者ご一同様の想いの形として愛でていただけましたら幸いです。

#### 宇佐美志都 (うさみしづ)



書家・文字文化文筆家。書を教えていた母の影響を受け、幼い頃より書を学び始める。福岡教育大学特設書道科卒業。個展活動や、自らの書廊・書庵での常設展示などを展開。平成15(2003)年、京都の認定NPO法人文字文化研究所にて、当時の理事長・白川静氏(文化勲章受章)より当時最年少で文字文化認定講師を拝命。平成21(2009)年、ロンドン芸術大学テキスタイル学科に留学。現在、東京を拠点に、書家・文字文化文筆家として書を制作するとともに、文字の成り立ちと日本の慣習にまつわる執筆や講演を行っている。

#### 佐野隆治 (さのりゅうじ)



昭和9(1934)年東京生まれ。慶應義塾大学法学部中退。昭和38(1963)年、神田外語学院の前身であるセントラル米英語学院の経営に参画、以来、神田外語グループの発展において中心的な役割を果たす。昭和63(1988)年に学校法人佐野学園の第3代理事長に就任。平成22(2010)年、理事長を退き、会長に就任する。平成29(2017)年3月永眠。享年82歳。